北原白秋

人と作品

清水書院

北 原 白 秋 ■ 人と作品 22 350円

昭和44年6月5日 第1刷発行 ©

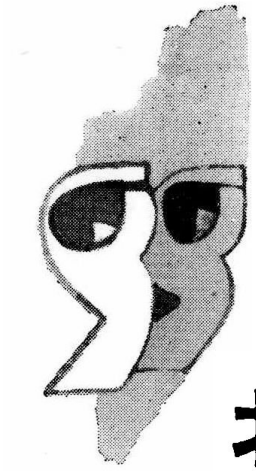
検印省略

落丁本・乱丁本は
おとりかえします

• 編著者……恩田逸夫（おんだいつお）
• 発行者……清水幸雄
• 印刷所……豊栄印刷

• 発行所／清 水 書 院／東京都新宿区東五軒町 5
Tel • 東京 (260) 5261～6／振替口座 • 東京5283
郵便番号 162

CenturyBooks 清水書院



北原白秋

●人と作品●

恩田逸夫

CenturyBooks

清水書院

序

大正時代の末、小学校の五、六年生のころであったと思うが、同級の友人の家で童謡の本を見せてもらったことがある。そのとき目にふれた「ほうほう螢。篠螢。」「水神様はまだ遠い。」ということばが、いまだに印象に残っている。雑誌『赤い鳥』などで童謡を読んではいたが、童謡だけで一冊の本になっているのを初めて見たことであるし、子ども心にも作品の味わいにひかれたらしく、「ほうほう螢」ということばが脳裏の隅に刻まれたのであろう。これが、白秋を意識した最初であるが、今にして思えば、「螢」は水郷柳河の風物で、詩集『思ひ出』その他、白秋文学の主要な題材である。

次に、旧制高等学校のころは、校内の短歌会に出席していたので、文庫本で白秋自選歌集『花樫』や、当時新刊の添削実例『鎖』を読んだりした。この短歌会の実作上の傾向は写実が中心であったが、自分としては、よくわからぬながらも、ローマン的傾向にひかれる点もあって、白秋へも接近していたように思われる。昭和十六年以降の兵役期間も腰折れをノートに書きつけてはいたが、歌書に接する機会はほとんどなかった。ところが、終戦の翌年中支から復員してくると、焼野原の東京ではあったが、これからは本が読めるぞという気持ちで集め始めた蔵書のなかに、『真珠抄』や『海豹と雲』があり、戦時中刊行の八巻本の『白秋詩歌集』や『水の構図』などが見いだされるのは、やはり白秋への関心がはたらいていたからであろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

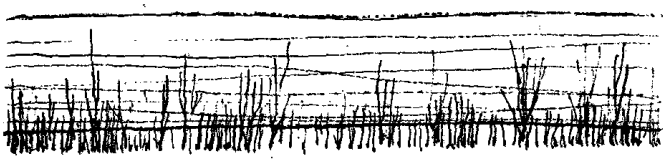
そのころ、宮沢賢治の作品に興味を持って調べていると、彼が白秋から大きな影響を受けていることを知り、両者の文学に共通の思想を見いだしたりしたので、「宮沢賢治における白秋の投影」という文章を発表したこともあった。いずれ、白秋についてまとめてみたいと考えていたので、本叢書監修の福田清人教授から二、三の作家を挙げて執筆のおすすめを受けたとき、さっそくそのなかの白秋を選ばせていただいた。

本書は作家論としての「生涯」編と、作品論としての「作品と解説」編の二部から成る。前者では生活史の推移を中軸とし、これに制作史の展開を密接に連係させることによって、詩人・歌人としての生涯を具体的にしようとつとめた。このため、なるべく多くの作品を引用して文学活動の実際にふれることができるように配慮した。次に作品論では詩を中心として、制作史的に考察したが、ここでは多くの作品を挙げることよりも、詩業の本質的性格を掘り下げることに意を用いた。このため、たとえば三崎時代の『印度更紗』や『雲母集』などについては、かなりの量の紙面を費している。第一編・第二編の、生活史と制作史との両面によって、豊かな生命力の躍動する白秋文学の特色を解明することができたら幸いである。

執筆の機会を与えられた福田教授、本文中の写真その他の資料を快く貸与された北原菊子夫人、隆太郎氏、本になるまで直接お世話になった清水書院の方々、とくに、怠惰なわたくしを激励してくださった辰野一郎氏など、以上のご教示ご協力に対し、厚く感謝の意を表したい。

昭和四十四年五月

恩田逸夫



目次

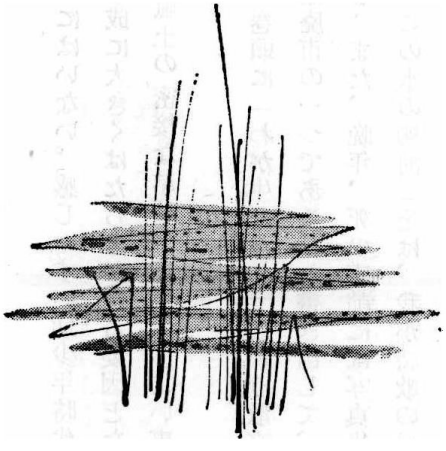
第一編　北原白秋の生涯

郷土……八
上京……一三
青春……四〇
遍歴……五四
拡充……六四
豊熟……九四

第二編　作品と解説

○白秋文学の特色……一一二
象徴詩の新領域……一一六
柳河と東京……一三四
日光と落葉松……一六〇
総合的詩境……一八四
白秋短歌の輪郭……一九四
年譜……二一六
参考文献……二三〇
さくいん……二三二

第一編　北原白秋の生涯



郷　土

詩人の風土　人はだれでも風土という生活環境の影響を受けずにはいない。感じやすい幼少年時代を過ごした土地の自然や文化の特色は、その人の人間形成に大きくはたらきかける要因となる。白秋、北原隆吉とその郷土柳河（現在、柳川市）との関係も、人と風土の密接な結びつきを示すよい事例である。

白秋は、幼少時代の追憶を基調とする抒情小曲集『思ひ出』の巻頭に「わが生ひたち」という散文を収めている。その中で「私の郷里柳河は水郷である。さうして静かな廃市の一つである」と書き出して、以下この水郷のもつ南国的な風土性をきわめて生き生きと描写している。また、晩年、死の直前には写真集『水の構図』に序文を寄せて「水郷柳河こそは、わが生れの里である。この水の柳河こそは、我が詩歌の母体である」「この水の構図この地相にして、はじめて、我が体は生じ我が風は成った」というように、白秋の身体を生んだ郷土が彼の詩歌を生み、ことにその作風を形成している点を強調している。白秋が柳河で生まれたことは偶然ではあるが、柳河が白秋という「詩人」を育てたことは偶然ではない。

柳河は周囲に広い平野を持った水郷である。久留米・熊本・佐賀に通ずる交通至便の地で、西南に有明海

がひらけている。このような明るく開放的な地相は、温暖な気候とともに、快活な南国的風土性をつくりあげている。

柳河は城を三めぐり七めぐり水めぐらしぬ咲く花蓮
街堀は柳しだるる両岸を汲水場の水照穏に焼けつつ
水の街棹さし来れば夕雲や鳩の浮巣のささ啼きの声

と白秋がうたっているように、城あとを中心として数多くの水路が町を貫き、岸には柳が植えられ、水面には、蓮・菱・河骨などが色とりどりの花をつけ、うす紫のウォータヒヤシンスの群落も見られる。鳩鳥が泳ぎ、夏には螢がとびかう。こういう自然景観を持つ柳河は、かつて立花藩十二万石の城下町として栄えたが、明治以降は鉄道幹線から離れたため、新時代の活気からはややとり残された感がある。静かな「廃市」の持つ懐古的情趣もまた、白秋の詩風の一要素となっている。

彼の生家は、柳河の西南に接する沖端というところにあって、この地は直接、有明海に接している。六騎ともよばれるが、それは、昔、平家の落武者六騎が定住して漁業をはじめ、部落のもといを開いたからだという。海に接して漁業や交易を中心とする活動的な生活は、城あとに近い地域の人々とは異なる気風をつくり出している。このことについて白秋は「海に近いだけ凡ての習俗もより多く南国的な、怠惰けた規律のな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

い何となく投げやりなところがある。さうしてかの柳河のただ外面に取りすまして廃れた面紗のかげに淫らな秘密を匿してゐるのに比ぶれば、凡てが露で、元気で、また華やかである」（「わが生ひたち」）と書いている。

柳河とともに白秋をつくりあげたもう一つの風土は母の実家のある熊本県玉名郡関外目村（現在、南関町外目）で、彼はこの地を「第二の故郷」とよんで親しんでいる。

「私の第二の故郷は肥後の南関であつた。南関は柳河より東五里、筑後境の物静かな山中の小市街である。その街の近郊外目の山あひに恰も小さな城のやうに何時も夕日の反照をうけて、たまたま旧道をゆく人の瞻仰の的となつた天守造りの真白な三層楼があつた。それが母の生れた家であつて、数代この近郷の尊敬と素朴な農人の信望をあつめた石井家の邸宅であつた」（「わが生ひたち」）

このように、幼い白秋の魂は筑後の海と肥後の山とによってはぐくまれていったのである。

白秋の家系

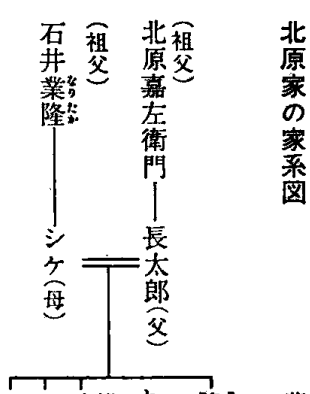
白秋は、明治十八年（一八八五年）一月二十五日（戸籍上は二月）、福岡県山門郡沖端村大字沖端町五十五番地（現在、柳川市沖端町）に生まれた。本名は隆吉。父、長太郎（二十九歳）、母、シケ（二十五歳）の長男である。長太郎と先妻との間に豊太郎とカヨの異母兄姉があったが豊太郎は八年前、生後間もなく病没したので、隆吉は戸籍上は次男であるが、長男として扱われた。彼の三歳上に異母姉カヨ、二歳下に弟鉄雄、五歳下に妹チカ、八歳下に妹イエ、十一歳下に弟義雄がいる。姉カヨは酒蔵家に嫁し、ふ

たりの弟は出版界で活躍、イエは白秋の親友、画家山本鼎に嫁した。チカは書画・手芸などに巧みで芸術家的素質を持っていたようであるが、少女時代に他界している。

北原家は、代々柳河藩御用達の大きな海産物問屋で、父の代になると酒造業を中心とした。油屋あるいは古問屋の屋号で呼ばれ、九州地方屈指の老舗であった。あざみやたんぽぽの生えた、古い土蔵造りの屋根の下に、渋い店格子をすかして、銘酒をみたした朱塗の樽がならび、同じ色の桝が置かれていたし、母屋のうしろには十ばかりの酒倉が軒をならべ、酒造りの季節には大ぜいの男たちが働きにきた。水産物などの交易も盛んで、浜に出てみると、平土・五島・薩摩・天草・長崎あたりの船が生魚や塩魚や鯨、それに南瓜や西瓜など、たまには鷲鳥や七面鳥まで積んできて絶えず取引きが行なわれていた。このように白秋の周辺は、多くの人々がいそがしく立ち働き、大ぜいの来客が出入りして、明るい活気にみちあふれていた。

父は、若いころ色白で、でっぷり肥った体格であった。大家の主人らしく、出入りの人たちを一目で見渡せる茶の間で、唐金の大きな火鉢を前にして一日中座っていた。弟、鉄雄が「幼きころ」（『回想の白秋』所収）のなかで、「出ぎらひのお山の大将で、非常に我儘で肝癪もちで頑固な親爺であつた。それでゐて気が

北原家の家系図



＊通称は（　）内。　カヨ（加代）、キク（菊子）、イエ（家子）

弱くて、よっぽど怒らなければ人に小言も云へない人であった。」「絶対の独裁者で父の前で頭の上る人は無かった」などと書いているのをみると、気むずかしく厳然としているのは大家の家長としての姿勢であって、性来は心根のやさしい人物の姿が浮かんでくる。彼は次々と新奇なものを好み、しかもその規模が雄大であった。一時に何百羽という鶏を飼い、新しい種類を次々と入れて楽しんでいるうち、野犬にやられてだんだん姿を消すと、家鴨を飼いだし、次は豚ということになる。これらはいずれも純粋に楽しみの対象であって、実利が目的ではなかった。花壇には草花がみちあふれ、東京の種苗会社のカタログを見ては西洋種の苗や、球根をとりよせたり、朝顔を何百鉢も作ったり、蘭や万年青にも熱を入れて、それを専門に世話をする男をやとうほどであった。こういう、わがままで、ぜいたくで、無邪気で純粋な点、明るい好奇心や豊かさの愛好など、一口にいって向日的で積極的な気質は、白秋にも受けつがれているようである。家庭でのだだっ子のような美食家ぶりや旧きに執着せず、新奇を求めて気軽に住居を移す引越癖などにはどこかに父の気性と通う点がみとめられる。

一方、白秋の母は、夫に気に入るように仕え、子どもたちにやさしく接し、大ぜいの使用人の指図や来客の接待など、大世帯の主婦として家政をみごとに運営してゆく行き届いた婦人であった。白秋は数多くの作品で母に対する愛情をうたっている。このような穏だやかでしかもしっかりした母の性格は、彼女の生家の環境からつくられたものであろうか。柳河から二〇キロほどはなれた外目は静かな山の中の部落であり、石井家は広大な土地・山林を所有する地主階級であった。母の父、石井業隆は横井小楠の流れをくむ学究肌の

人で多くの書物に親しみ、近隣からは老侯のように尊敬されていた。当時、土地の習慣上母は白秋を実家の石井家で出産し、隆吉という命名もこの祖父の名から一字もらったのである。幼少時代の白秋は好んで外目を訪れている。

母の里

たいていの幼い者にとって、母の実家へ行くことはうれしいものである。ふだん生活しているわが家から離れるのであるから、改まった新鮮な気持ちになるし、それでいて全くの他人の家へ行ったような心づかいも不要である。先方でも、親戚だという心易さで迎えてくれるし、それでいて幼いながらも来客扱いをしてくれる。彼は外目の山で松脂（まつやに）の匂いをかぎ、いもりの赤い腹を知り、玉虫の光りや毒きのこの鮮かな色を見た。冷たく透明な山林の大気は、海に近い暖かくうるんだ沖端の空気とはまた異なる味わいで、幼年時代の白秋の感官を刺激した。

夏休みには必ず外目の山を訪れた。外祖父は近隣の声望を集めていた人であるから、孫の彼は道で会う農家の人たちに、ていねいに会釈される小公子であった。馬に乗ったり、昆虫をとらえたりして遊びくらした。あるときは、ひとりで蚕室（さんしつ）にすわって、かすかな音をたてて桑をたべているかいこの眼のふちの薄茶色の模様を見ながら、子どもごころにも、なにか人生寂寥（せきりょう）の感を覚えたりした。熊本英学校出のいちばん年若な叔父（おじ）は、この蚕室で白秋を実験台にして催眠術をかけたり、夜はこの邸の天守造りの手すりに出て笛をふいたり、催眠術の返礼として、アラビアンナイトや西洋の童話を聞かせてくれたりした。外目の祖父の蔵書

も白秋の文学趣味をつくる素地となっている。祖父は、雪の日の炉辺に、かわいい沖端の孫をひきよせて、なつかしそうにフランス式調練の小太鼓の旋律をうたって聞かせることはしても、孫にはまだ読書を許さなかった。しかし誘惑は強かった。「わが生ひたち」では次のように書いている。

「祖父の書架を飾つた古い蘭書の黒皮表紙や広重や北斎乃至草双紙の見かへしの渋い手触り、黄表紙、雨月物語、その他様々の稗史、物語、探偵奇談、仏蘭西革命小説、経国美談、三国志、西遊記等の珍書は羅曼的な児童の燃えたつ憧憬の情を嗾かして遂には、かの厳格な禁断を犯かさしむるに到つた。」

ここには、白秋の感覚的な読書遍歴の一端が示されている。ともかく、外目は、柳河とはまた異なった強い力で彼の心情の形成に影響を与えているのである。

柳河の「びいどろ鰻」　生まれた時の白秋は、きわめてひ弱な癇のつよい児であった。わずかな外風に当たっても、冷たい指さきに触れられただけでも、すぐ四十度近い高熱を出した。石井家では、壊れ物にさわるような気持ちで、だれもこわくて抱くことができず、柳河の「びいどろ鰻」（ガラス鰻）とあだなをつけた。柳河と外目を往来するにしても、人力車でなく、古めかしい女駕籠にしたほどであったが、それでも、ある時などは、着いてすぐ、駕籠の扉をあけて手から手へ渡されただけであおくなってひきつけてしまったという。ともかく、非常に神経の過敏な児であった。ところで、『新潮』の大正六年十二月号には「文壇諸家年譜」として、白秋の年譜が掲載されている。白秋の口述を記者が書き写したも

のらしいが、幼年時代の心理などについて、次のような驚くべき記録がある。たとえば、生まれた年の明治十八年の箇所には「夏、母と肥前小浜に遊ぶ、白蝙蝠傘の記憶今猶眼底にあり」と書いているし、二十二年（五歳）には「檸檬の味酸ゆかりし故、厭世観を起し、自殺せんとしたる事あり」、二十三年（六歳）では「雛祭りの日一つ年下なる某家の令嬢を恋す。この人知れぬ片恋二十歳迄続く」などとしるしている。生まれた年の記憶については、この印象が残っていることを話したところが、それなら小浜に滞在中に船で海を渡った時のことだということがわかり、おとなたちから大いに驚かれたという。

初恋については、「わが生ひたち」では「美しい小さな Gonshan. 忘れもせぬ七歳の日の水祭に初めてその児を見て」（ゴンシャンは令嬢の意）と書いていて、「新潮年譜」と一年ちがっているが、いずれにしても感じやすい幼年の心理がうかがわれる。このような幼年の記憶の断片は、だれの胸にも一つか二つは蔵されているはずであるが、それらの数々を意識的にとらえて、抒情小曲集『思ひ出』のような統一ある官能的世界を構築し、読者に共感を覚えさせている点に、白秋の詩業の卓抜さがみとめられると思う。

三歳のとき、弟鉄雄が生まれ、このチンカジョン（小さい坊ちゃん）に対して、白秋はトンカジョン（大きな坊ちゃん）とよばれた。柳河には、いわゆる南蛮紅毛文化の影響をしのばせるような外来語なまりらしいものと、土地在来のことばとが奇妙に入り混ってできた方言がある。白秋は、Tonka John, Gonshan などこのような柳河語を好んで作品のなかにとり入れて、郷土性や異国性に対する愛着を示している。たとえばビードロ（ガラス）ポープラ（南瓜）のように伝来のわかっていることばもあるが、ノスカイ屋（遊女屋）、ロ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com